

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520060  
 研究課題名（和文） 日常性の宗教学：一地方都市における幸福の探求をめぐる調査研究  
 研究課題名（英文） Religious Studies on Daily Life - Field Research on Social Happiness in a Local City  
 研究代表者  
 關 一敏 (SEKI KAZUTOSHI)  
 九州大学・人間環境学研究院・教授  
 研究者番号：50179321

## 研究成果の概要：

この研究は、地方都市をフィールドとして、主として聞き書きから、そこに住む人々の幸福への模索を描き出す試みである。ムラ社会との対比から、幸福の二類型、そなえの民俗、重要な他者、などの分析をへて、都会の時間が複数あること、空間も入れ子もように差異化されることに注目した。これに応じて生活者が臨機応変につきあい方を工夫し、ときに規範をたわめることで、さまざまな生き方の余白が生まれる。都会の幸福は、こうした多様性と自由度の仕組みにかかっている。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：日常性、ふたつの幸福、生きがいと無事、都会の民俗、時間の多様性と重層性、世間、福岡市、周辺

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 研究動向

日常性と幸福に関する研究は少なくないが、非日常と不幸からのアプローチが主流だった。

日常性：「文化体系としての常識」の民族誌(C.ギアツ)や「日常性の社会学」(エスノメソドロジー)、ハレを視野に収めつつの日常世界の探究に重心をおいた柳田民俗学の蓄積がある。宗教学では、儀礼・祝祭・憑依との

対比か、教団型の確固たる宗教世界との対比からとらえる傾向が強く、次の二点で宗教学の被制約性となっている。a) 現代の宗教現象は極度に自己言及性と集団性を高めたファンダメンタルな軸と、おそろしく飛散し日常化した宗教性の軸へと拡大しており、とらえがたい後者にこそ現時点の宗教学的課題が集約されていること。b) とりわけ日本の宗教状況を近代史的文脈でふりかえるなら、日常性とゆるやかにつながる宗教性をめぐる宗教学的方法の実験には、日本の宗教学固有

の課題がみいだされること。この点で「スピリチュアリティ」の宗教学は、a)において本研究と出発点を相同しているが、b)の方法的自覚において類比の域を脱しかねていると判断されよう。

幸福：研究の主流は、思索的哲学的人生論と消費社会の豊かさ研究に特化している。これをのぞけば 20 世紀初頭に I.トマスが指摘したように、人文学・社会科学による蓄積は断片的であった。日常的幸福を問うアカデミックな探求は、社会的「よきもの」(E.デュルケム)「ほっとするもの」(B.マリノフスキー)、「しあわせな人または家」(柳田国男)といった初発の社会学・人類学・民俗学に共有されながらその後の展開に乏しく、学問的大勢は、病・貧困・呪詛といった不幸の研究へと傾斜してきた。しかしながら近年、この課題にむかう二つのプロジェクトが構築されたのは注目に価する(「アジアから問う幸福」東京大学東洋文化大学研究所、2003～06。「人間の幸福に資する社会調査の研究」関西学院大学 COE、2003～07)。本科研代表者はこの両プロジェクトにかかわりつつ、その宗教学的展開を構想した。

## (2)着想の経緯

本プロジェクトの着想にいたった経緯は以下のようなものである。代表者は、70 年代からの祭り、90 年代の呪術の調査研究をとおして、自己言及的な宗教現象(近代キリスト教モデルによる教団型宗教)は、その裾野に広大な日常世界とそこに伏在するかすかな宗教性の層をかかえて成立していることに注目するにいたった。特化した宗教集団や祝祭、あるいは呪術世界の思想的・行為論的研究ではなく、日常生活に隣接・埋没した現象を対象化する方法の探究には、現代日本の宗教学にとってアクチュアルな課題がみいだされる。そのさい、日常性の研究にもっとも蓄積の厚い民俗学的感性と方法的視角を宗教学へと回収すること。とりわけ都会のモダニティをフィールドとする本研究では、近代へと測深する歴史的視野をもつ民俗学者との共同作業が必須であると判断した。

## 2. 研究の目的

本研究では、非日常世界を軸に展開してきた宗教学的研究の、日常世界への転換を試みた。一地方都市(福岡市)をフィールドとして、日常生活の構築過程と、これを輪郭づける周縁化した現象を対象とし、方法的には、これまで日常性研究に最も実り多かった民俗学的視角との協働を図る。「日常性の宗教学」と題したのは、此岸の幸福・俗世界の生きがい調査現場から対象化する方途を模索したいからであり、副題には、ローカル/ナショナル/グローバルの問題系の予測をこめ

た。総じて、現代社会における日常的幸福をめぐる宗教学の地平をいささかなりとも開くことが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

### (1)場としての都会

福岡市をフィールドとして以下の研究を試みる。まず、都市の日常をつくる場として「家庭・仕事・往来」に注目し、主題として「幸福・生きがい・都市的ローカリティ」をおく。と同時にそうした日常の周縁から生活世界の輪郭をつくる、いわば負の社会現象として「貧困・差別・悪所」をとりあげ、そのリハビリテーション過程がむしろ社会的不幸の再生産をもたらす厄介なしくみと、それゆえに市民的日常がきわだつ逆説的状况を明らかにする。そのなかで個々にかすかな生きがいと幸福を求める生活者の、足元からの夢とその現実世界を聴きとり読み解く。

### (2)周辺から照らす

A) 日常の作りかた：下記 a)b)c)の往還によって日々の生活そのものを構築する過程。a) 仕事 b) 家庭 c) 社会活動

B) 日常の輪郭を作る：日常からやや周縁化した現象と、都会的日常の中核の現象をとりあげる。a) 日常的周縁とそこからの回復過程(リハビリテーション) b) 日常的中核とその都市性の演出(パフォーマンス)

### (3)聞き書きの方法的模索

聞き書きを主軸とする本研究の前提は、日常的な幸福や生きがいは、本人にとっても確固たる行為や言語によっては表明されないことにある(自己言及性の稀薄さ)。これをふまえて以下の試みをする。

A) 対話型調査方法にむけて。不幸に比して幸福が、非日常に比して日常が対象化されにくいのは、それらがかすかな徴候の集積からなり、すでに蔽としてそこにある状態ではないからである。ここから対話的還流型調査の必要性和必然性が生まれる。フィールドワークによって照らすというよりは、話者が自らのライフ(生活と人生)を語ることでその「幸福」を再定義する過程そのものが、おのづと調査者にリトマス試験紙としての役割を課すことになる。

B) 時間と記憶のひろがりのなかで。幸福な日常の自覚はまた、かつてそうであった記憶のなかでなされる。家庭生活の幸福さは記憶のなかでしか確認されない(重信によるホームの研究)。この場合、当事者による過去の自己との対話を調査者が聞きとる形になる。この時間軸上のしくみは、日常的幸福研究の未来への透視図を与えるとともに、年代的文脈への配慮を必要とする。

C) 地方学(ぢかたがく)の実験。初発の日本

民俗学は、足元(それぞれの郷土)から世界を見上げる方法を地方学とよんだ(新渡戸稲造、柳田国男)が、現実には国民国家イデオロギ-に回収される結果に終わった。本研究の目標は、その現代版としてグローバリズムに抗するローカリティの配置と戦略を読み解く試みをおこなうことである。

#### 4. 研究成果

本プロジェクトの要である「日常性」と「幸福」のうち、理論的展望にあつては「幸福」に、調査資料の集積にあつては「日常性」に比重が傾くことは当初から予測していた。「不幸」が形をとりやすく、そのぶん言語化しやすいのに比して、「幸福」は当時者にも自覚しにくく言表にいたらない不思議な事態だからである。この調査における幸福・生きがいの析出方法の困難さは、柳田國男らの山村生活調査(1934-36年)以来の聞き書き調査のおおきな課題であった。以下、不十分ながら、今回の成果とその理論的前提を四点にまとめる。

##### (1) ふたつの幸福

幸福には、求めて得られる「アチーブメント型」と、受け身の「まちうけ型」のふたつがある。前者は西洋的 happiness の訳語であり、後者は「しあわせ」の原義にあたる。「さち、さいわい、しあわせ」はいずれもめぐりあわせの良し悪しをいい(「しあわせよき」「海山のさち」といった語法)、努力達成型の積極的・自覚的なはたらきかけである幸福探求とは異なっている [論文① 關 2008]。

この二類型は日本近代の語彙史からの抽出であり、「しあわせ」観に「幸福」happiness 観がかぶさってきた近代的状況をあらわしている。よって、①「しあわせ」と「ハピネス」、あるいは受動と能動のふたつが濃淡を示しながら現代都市社会には併存している。②定義も明言もないが、モノとふるまいに託してめぐりあわせのよさに願をかけるようなあり方がある。日常的な場面では縁起をかつぐ、やや日常を離れてお百度を踏む・厄を祓う・願を掛ける、などがそれであり、都会の小さな神仏がこれに呼応している(福岡市博多区若八幡宮の厄祓い、博多区崇福寺境内の旭地蔵のお百度参り、早良区野芥の縁切り地蔵など)。

##### (2) そなえの民俗と重要な他者

ハビトゥス(モス、ブルデュ)はふつう行為の生産と再生産をまかなう集蔵庫と説明される。これをギリシア思想史とキリスト教神学史の文脈にもどすと、聖体拝領によって人体内に注入された恵みとしての習性を意味する。中世神学の清水哲郎は、的確にも記述の角度をかえてこれに「備え」の訳語を与えた。英語を話すという「働き」actus にたいし

て、その場で話していなくとも話そうとすれば話せる人には英語を話す「備え」habitus がある、と云う。すなわち、ハビトゥスには「そなえ」もしくはそのための「かまえ」といった可能態がふくみこまれており、場面と状況によって実現態としてのアクトゥスへと移行すべくまちうけている。この意味での、将来するであろう事態と出来事に備える力のありかを日本語では「民俗」とよんできた [論文② 關 2008]。

福岡市内の人生史の聞き書きから得られた知見によれば、職人・芸人・絵師・料理人・バーテン・理髪業等々の技術のもち主たちは技芸の修練について「重要な他者」との出会いを物語る。親方・師匠・先達・仲間・顧客によって、かれらは働く現場で技を習得してきたのであり、つてにつてをたどって予想以上にしげく各地をめぐりながら、そこでの技の習得と上達がつぎの出会いを生む、といった重疊的連鎖がみられる。いまは博多で名のおった絵師は、師匠の不在ゆえの独習をかちながら(地方都市の人材の希薄さ)、目標としての先行者との親交(地方都市ゆえの人間関係の濃密さ)と、全国的に知られる芸人との交流(地方都市ゆえの来訪者との出会いやすさ)をてこに博多の絵を描きつづけている。

そなえの民俗は、その人物の人生の夢・希望・願いの方向へと技芸を高めながら、そこに将来する出来事への準備・かまえを生むプロセスである。技の習得には孤独な作業が必要だが、その雛型として直接・間接の「重要な他者」が介在する。独習もまたメディアや書物による、外部にいる先行者との接点をへて可能となる。ちなみに料理名人たちの、人からではなく本から学ぶ知識とヒントの量の多さは予想をはるかにこえていた。これがリテラシー普及の帰結であることは確かだが、現代のメディア状況ゆえか、過去に遡及できる事実なのか、まだ確定できない。

以上は技術のもち主たちの話だが、モノを商う商家や、接客の現場もまた、対顧客関係の技を養っている。端的な例をあげると、戦前からの商店街にあるオモチャ問屋かつ小売り店では、占有場所と値段とのつりあいが取れないという理由でファミコンをおかない。また夜9時から朝4時までのバーでは、空気のあわない客はやんわりと(時にはっきりと)断りをいれる。いずれもその時々ではなく、長期の客スジを想定してのふるまいであり、店の輪郭をつくるかまえにかかわる。客が店をではなく、「店が客を選んでいる」。

今回の調査では部分的(主としてAの a)にしか実現していない全体の見取り図を以下にあげておく。

- A) 個々人のそなえ
  - a) 仕事 モノを作る、ひさぐ  
客を見る、つかむ
  - b) 人生 上手に老いる、或は老いない  
遊ぶ
- B) 出会いと社交の作り方
  - a) 場所と機会 ムラとの対比で
  - b) 出会いの濃淡  
出会う・薄く出会う・出会わない(そ  
らす、みのがす)  
重要な他者、重要でない他者  
人生の大きな節目・小さな節目
  - c) つきあい  
ツレ(仲間、同人、結社)  
支える、励ます、守る  
ケンカの防ぎかた、収めかた  
別れと終わり
  - d) 評判のしくみ  
うわさ、ロコミ
- C) 集団のそなえ
  - a) 都会の一年 四季の風物、行事
  - b) 都会の一日 夜から朝へ、大人と子供

### (3) 複数の時間

都会は相異なる複数の職業者の往来する場であり、機能をたがえたさまざまな地域や境界の凝集体であるから、職種と地域によって流れる時間に個性があるだろうことは予測していた。しかし、職業的な時間帯のズレや、人生階梯上の時間速度のちがいは、「教会の時間と商人の時間」(ル・ゴフ)「ムラの長い時間」(ゾナパン)といった社会史的発想未満の基礎資料にすぎない。記憶と現実世界双方での「生き方の複数性」にかかわる時間論を考えたい。

#### A) 多様な時間

いくつかの聞き書きから、全体的な時間とのかかわりを自覚的にか無自覚的にか変形して生きる方法をとらあげる。

##### a) 時の目盛りを拡大する。

いまは裏路地になったかつての繁華街やアーケード街、ビル内の市場が福岡市内にはまだ点在している。その一面に時計部品の商店があり、その店主は30年単位で古い部品をそろえている。整理と保存がたいへんだが、評判を聞いて遠方からの問い合わせと注文が多い。一朝一夕にできるやり方ではなく、流通の速度とはちがう商売感覚と信念が必要である。また、祭事と芸事の多い都会では和装の需要が多く、呉服屋を中軸に襟屋、悉皆屋、染物屋、小物屋らがたがいに重なりながら和装文化の下支えをしている。これも世代をこえた30年から百年単位の商品とのつきあいであり、同時に顧客との長期の往還がみこまれている。貨幣経済と物流の条件は他と同じでも、商品を介した顧客との時間幅を人生の時

間へと拡大することで、つくる→売る→買うの線条を円還へと変形するのである。

##### b) 時の目盛りをもどす。

祭事が労働に節目をつくることは集団のしくみであり、個人はこの集団的次元にもかかわりながら、ふだんは個々人の娯楽や趣味で労働に節目をいれる。趣味や娯楽の趣向によって節目のつくり方は異なるが、ここではアングラ劇団と絵はがき収集家に注目したい。

月に一度の日曜日、宮崎宮参道で200店舗余の蚤の市「風の市場」が開かれる。十余年前からのこの市は、骨董商かつ劇団主催者である人物の発案と努力で成立している。劇団は32年の歴史をもち、その脚本には炭塵爆発事件や魚雷回天の製作等々、九州ローカルをとおして日本近代史の地下水脈を掘る、という意味でのアンダーグラウンド性がある。宮崎浜のテント芝居にくりかえし登場する事件の記憶と近代史の暗部の発掘は、今のようにない現代(可能態としてのもうひとつの時間)への橋渡しのころみである。この時間とのつきあい方は、職業としての骨董商のそれと相似している。

この蚤の市で朝から趣味の品を探索したあと、ひとりの収集家を中心に天神のジャズ喫茶で「絵はがき研究会」が開かれる。絵はがきを中心とする印刷物(ラベル、チラシ等)の知識は広範囲かつ高度であり、時代と被写体をほぼ正確にいいあてる。モノの収集も同じことだが、絵はがきの写真はとくに町や自然の過去をきりとりて再現する、情報量の多い媒体となる。趣味を徹底することで図書館・博物館・美術館のアーカイブと同じ役目を収集家たちは担い、時の目盛りをとめたりもどしたりする装置をゆるやかな収集ネットワークに温存するのである。

こうした人生史の累積から浮かびあがるのは、変化の速度を競う時代にあっても、時間をゆるやかに減速する生き方が確かにあり、それが「長い時間」のハビトゥス(そなえ)への可能性をひらいて、マチバの生き方の重要な支えとして、またモデルとして働くことである。

#### B) 重層する時間

幸福・しあわせについて直接たずねても有意な反応がないことは、山村調査以来の課題だった。しいて問うなら、平穏であること・無事であることという答が返ってくる。よって、幸福・しあわせの深意は本人のコトバや記憶からは直接よむことができない。むしろ、平穏や無事という、凡庸ともみえる慣用語に探究のヒントを読みたい。ハンセン病と被差別部落という、歴史的に社会の周辺においやられてきた人々の話からの分析であり、ここ

では結果のみを記述する。

われわれの生活世界(虫の目)は、法・行政の世界(鳥の目)と相対的に独立しながら、かんどころで方向規制を受けている。差別問題の要はもうひとつ、このふたつの間には両者をつなぐ世間(道徳・世評・社会通念・常識)があり、この三者が、それぞれ相対的に独立しつつ、それぞれに固有な時間の流れをもつことにある。無事あるいは平穏と云われる状態とは、この三者が調和的に配置されていることの別名ではないか、というのが暫定的な結論である。調和的な配置の一例として、法・行政からも世間からも干渉されない自由な生活世界のあり方(「平凡な生活」「並みの暮らし)をあげることができる。

「無事」の課題は以下の三点である。

- a) 三者の調和的配置の類型化
- b) 非調和とその回復方法の事例の集積
- c) 都会の時間の多様性(上記(3)Aa)b)とこの三次元の時間の重層性はどのようにかかわるか。

なお、前項(2)C)b)にある「夜」の主題は、ムラの日常的な夜の忌避もしくは未形成にたいして、マチバの夜の日常性の構築には都市の都会性があるという主張だったが、祭りと日常、闇と光、盛り場と家庭といった仕分けをふくんだ分析にも、今回のプロジェクトは及んでいない。これについては、盛り場のふたつの時間(夜と朝)の転換のしかけにマチバの工夫があり、歓楽と遊びから仕事の時間へと人々をおくりだす仕組みがみられることの指摘にとどめる。

#### (4) 複数の空間、複数の行為原理

(2) 末尾の全体像にあげたB)とC)について簡単にふれておく。

福岡市は歴史的に商人の博多部と、武家の福岡部から成っている。この気風はいまでもいりくみながら再生産され、とくに博多部のハカタ意識は強固である。その一例は祇園山笠であり、中心部のドーナツ化現象とともに祭りの担い手(掻き手)が極度に減少した1970年代から、近隣住民(加勢町)に加えて、住民でなくとも仕事場のある人々や外来者を受け入れるにいたったものの、役職や役割の中核は旧来の住民が担っている。山笠は祭事だが、そこでの出会いと交流は博多部というマチバで生きるための社会財となる。ソトから見ればひとつの福岡は、まず福岡/博多に二分され(正確にはさらに周辺地域がある)、その博多部は区制による博多区の北端のごく一部である。都会の特徴として、中枢の歴史あるマチバを中軸にウチとソトには入れ子構造がみられ、近隣であろうとヨソモノ感覚ははっきりしている。山笠に参加して30年、旧博多地区に住居を移して20年の人物は、それでもまだヨソモノ意識がぬけない

ことを悪目立ちしないふるまいとつきあい方でおぎなっている、と語る。この社交の技法は都会の区分けの現実(C複数の空間、差異化する空間)をふまえたつきあい方(B)の一例である。

いっぽう旧博多区の住民たちは、その内部では、ハカタに生まれハカタに育ちハカタに嫁いで一泊二日の小旅行をのぞいてハカタで生活しつつけてきた女性が例外でない状況とともに、旧博多内四校区で育った者どうしが1980年代までは互いに知りあうことがなかった(その必要がなかった)奇妙に疎遠な状況をも経験してきた。人口減少による校区の再編成とともに町おこしの気運が高まり、それ以前とは異なる空間意識と帰属意識が芽生え、つきあいに変動が生じたのがここ20年のことである。

最後に都会の人間像にふれておく。商家の商いの技にみられる社交術・職業倫理に、「ほめられる若者や女性」像が反映していることは確かだが、もういっぽうの極に「半人前」の人物像がたしかな位置を占めている。それぞれ語法と評価の度合いは異なるが、「おおびよこ」「のぼせもん」といった多分に肯定的な、あるいは否定的とはいいきれない人物評価があり、そこからはみでる遊び人をふくめてゆるやかに見守る視線がある。この視線の所在が、ムラならば半人前の人物が都会に生きることを可能にしている、というのがB)にかかわる暫定的結論のひとつになる。人とのつきあい方に頻出する笑いとおどけ(仁和加)とともに、マチの守り人・番人との相互性に都会論の鍵があると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 關一敏「鳥の目と虫の目：しあわせの民俗誌(2)」『幸福－共生社会学論叢・特別篇』39-56、2008年、査読無
- ② 關一敏「慣習論・覚書」『慣習－共生社会学論叢Ⅲ』1-4、2008年、査読無
- ③ 重信幸彦「〈遊撃〉の町へ」『国文学 解釈と鑑賞』73巻8号、139-146、2008年、査読無
- ④ 重信幸彦「採集する身体へ：清張、小倉そして民俗学」『松本清張研究』第8号、92-117、2007年、査読無

〔学会発表〕(計3件)

- ① 關一敏「宮田登の民俗学を語る：非凡な隣人」日本宗教学会、2008年9月15日、筑波大学
- ② 重信幸彦「郷土研究と実践のリテラシー」国立歴史民俗博物館第63回歴博フォーラム

ム「民俗学の行方」、2007年12月1日、  
東京大学

- ③關一敏「宗教を分ける：類型論の現在」日  
本宗教学会、2007年9月17日、立正大学

[図書] (計2件)

- ①重信幸彦(ほか8名)『民俗学的想像力』、せ  
りか書房、2009年、283ページ  
②飯嶋秀治(ほか14名)『アクション別 フィ  
ールドワーク入門』世界思想社、2008年、  
272ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

關 一敏 (SEKI KAZUTOSHI)  
九州大学・人間環境学研究院・教授  
研究者番号：50179321

### (2) 研究分担者

重信 幸彦 (SHIGENOBU YUKIHIKO)  
北九州市立大学・基盤研究センター・教授  
研究者番号：70254612

飯嶋 秀治 (IIJIMA SHUJI )  
九州大学・人間環境学研究院・准教授  
研究者番号：67452728

### (3) 連携研究者

なし